

第1話 王政維新

王政復古の^{とくがわよしのぶ}大号令を^{じょがい}発すると共に、^{ふんきゆう}朝廷は^{ぼうぎやく}新政府を組織するが、^{さつまはんてい}前將軍^{どうかせん}徳川慶喜を^{いわるいしん}全く除外したために、^{どうらん}旧幕府方との関係が大いに^{どうらん}紛糾する。江戸における浪士の暴虐、薩摩藩邸の焼き討ちが^{どうらん}導火線となつて、所謂維新の動乱が起こる。

王政復古

第122代^{めいじ}明治天皇の慶応3年10月14日、^{よしのぶ}將軍^{しよ}徳川^{ちゆうてい}慶喜が、^{たいせいほうかん}書を朝廷に出して大政奉還すると、翌15日、朝廷はこれをお許しになったので、^{しやうぐんしよく}慶喜は更に其月24日をもって^{じたい}將軍職の^{しやうぐんしよく}辞退を申し出た。こうして12月9日には、いよいよ^{おうせいふっこ}王政復古の^{ごうれい}大号令が^{はつ}発せられて、新政府が組織され、従来の^{しやうぐんしよく}摂政、^{じたい}関白、^{ぎそう}征夷大將軍以下、^{てんそ}幕府^{しゆごしよく}関係の^{しよしだい}議奏、^{かんしよく}伝奏、^{かんしよく}守護職、^{はい}所司代などの官職はことごとくこれを^{はい}廃して、新たに^{そうさい}総裁、^{ぎじやう}議定、^{さんよ}参与の3職を^{しやうぐんしよく}設け、^{しやうぐんしよく}諸事を^{しやうぐんしよく}神武天皇の創業の昔に基づいて、^{しやうぐんしよく}上下の別なく^{しやうぐんしよく}至当の公儀をつくし、^{あんき}天下と^{おおい}安危を同じくするようにと^{おおい}仰せ出された。

そして^{ありすがわのみや}総裁には^{たるひと}有栖川宮^{にんなじのみや}（熾仁親王）を^{よしあき}任じ、^{やましののみや}議定には^{あきら}仁和寺宮^{あきら}（嘉彰親王）、^{あきら}山階宮^{あきら}（晃親王）、^{なかやま}中山^{ただやす}前大納言^{おおぎまちさんじやう}（忠能）、^{さねない}正親町^{なかみかど}三條^{つねゆき}前大納言^{おわり}（実愛）、^{とくがわよし}中御門^{おわり}中納言^{とくがわよし}（経之）、^{とくがわよし}尾張^{とくがわよし}大納言^{とくがわよし}（徳川慶勝）、^{かつ}越前^{えちぜん}宰相^{まつだいらよしなが}（松平慶永）、^{あき}安芸^{あきのながたか}少将^{とさ}（浅野長勳）、^{やまのうちとしげ}土佐^{さつま}前少将^{しまづしげひさ}（山内豊信）、^{さつま}薩摩^{しまづしげひさ}少将^{しまづしげひさ}（島津茂久）の10人を^{おおい}任じた。

参与には^{おおほら}大原^{しげとみ}宰相^{までのこうじうだいべん}（重徳）、^{ひろふさ}万里^{はせさんみ}小路^{のぶあつ}右大辨^{いむくら}宰相^{ともみ}（博房）、^{いむくら}長谷^{ともみ}三位^{ともみ}（信篤）、^{ともみ}岩倉^{ともみ}前中將^{ともみ}（具視）、^{はしもと}橋本^{さねよし}少將^{おわり}（実麗）の5卿の外に、^{えちぜん}尾張、^{さつま}越前、^{とさ}薩摩、^{あき}土佐、^{あき}安芸の5藩から各3人づつ、合わせて15人の藩士をもって、それに^{さいごうたかもり}任じた。^{おおくぼとしみち}西郷^{ごとうしやうじろう}隆盛、^{ふくおかこうてい}大久保^{ふくおかこうてい}利通らは^{ごとうしやうじろう}薩摩藩から、^{ふくおかこうてい}後藤^{ふくおかこうてい}象二郎、^{ふくおかこうてい}福岡^{ふくおかこうてい}孝悌らは^{れつ}土佐藩から入ってこれに^{れつ}列した。

小御所会議

こうして其の日の夜に、^そ天皇は^{しゆつぎよ}小御所に出御され、新たに^め任命した^め三職の人々を^め召して、^め王政第一着の^め会議を開かれた。（これらの事はすでに第五巻江戸時代の「大政奉還」の話にも一応は述べましたが、今、維新の戦乱を語るに当たって必要な^{いと}順序なので、^{いと}多少の重複を^{いと}厭わず、^{いと}繰り返してまた述べる。）

ところが、この会議の席上で、はしなくも^{げきろん}大激論が^{ぼっぱつ}勃発した。^{やまのうちとしげ}議定の^{まつだいらよしなが}山内^{まつだいらよしなが}豊信や^{まつだいらよしなが}松平^{まつだいらよしなが}慶永らが、^{よしのぶ}前將軍^め徳川^{あづか}慶喜を^{あづか}召して、^{あづか}新政に^{あづか}与らそうと^{あづか}主張したのに対して、^{おおほらしげとみ}参与の^{いむくらともみ}大原^{おおくぼ}重徳、^{いむくらともみ}岩倉^{おおくぼ}具視、^{おおくぼ}大久保^{おおくぼ}利通らが^{おおくぼ}断じてこれに^{おおくぼ}反対したからです。

それで、今、そのいきさつを簡単にお話しようと思うが、それには先づ^{よしのぶ}慶喜の^{よしのぶ}位置を一応見ておく必要がある。

慶喜の位置

これより先き^{よしのぶ}慶喜は、^{じたい}大政を^{ようせい}奉還し^{なぶん}將軍職の^{ごさた}辞退をも^{くだ}要請して、この時は何分のご沙汰が下るのを二条城で待っていたのですが、^{ないだいじん}身は^{たいせい}なお正二位内大臣です。^{いにいん}大政すなわち朝廷から^{いにいん}委任を受けて、^{いにいん}ほしい

第1話 王政維新

ままだに天下の政治を行^{おこな}う権^{けんりよく}力をこそ還^{かえ}したものの、全く政治から退^{しりぞ}こうとしたのではないのです。いやいや、新たに組織されるべき新政府には、勿論、自分も参与として大いに国家のために尽くそうとしていたのです。だからこそ、政権返上の上奏文にも、

「況^{いわん}や当今外国の交際が日に盛んになるので、いよいよ政令一途に出で申さず候^{こう}ては、綱紀立ち難く候ゆえ、従来の旧習^{きゅうしゅう}を改^{あらた}め、政権を朝廷に帰し奉^{かえ}り、広く天下の公議を尽くし、聖断^{せいだん}を仰ぎ、同心協力して共に皇国を保護^{こうこく}仕^ほり候^{ごつかまつ}えば、必ず海外万国と並び立つべく候。臣慶喜^{せいき}国家に尽くす所^{ところ}これに過ぎずと存^{ぞん}じ奉^{たてまつ}り候」と書いていたのです。

ところが、この時、朝廷の実権を握っていたのは、岩倉具視^{いわくらともみ}を中心とした倒幕派^{とうばくは}の人々でしたので、彼等^{さばくは}は佐幕派^{さばくは}の者は一切これをしりぞけて新政府を組織して、一挙に王政維新の大革新をしようとしていたのです。勿論、慶喜^{よしのぶ}を三職のいづれにも加えようとはしなかった。

やまのうちとよしげ せいろん 山内豊信の正論

そこで問題が起こったのです。

第一に、心^{しんちゅう}中大いにこれを憤^{いきどお}って、宜^{よしのぶ}しく慶喜をも召して大政に参与させるべきだと言^とい出したのは、土佐の前藩主^{やまのうちとよしげ}山内豊信^{ようどう}（容堂）でした。彼は慶喜^{よしのぶ}に勧め^{すす}めて大政を還^{かえ}させた当人であるので、一つはその責任を感じたのでしょうが、又一つは、幕府をこそ見限^{みかぎ}って大政を還^{かえ}しさせたものの、もともとこれは平和に事を始めようとしたからで、徳川家の宗家^{そうけ}を全^{すべ}て政界からしりぞけてしまおうなどとは思^{せいかい}ってもみなかったからです。



やまのうちとよしげ ようどう
山内豊信（容堂）

彼は先づ、「王政維新の初めに当たっては、何事も公平無私^{こうへいむし}の心をもって処理^{しより}しなければ、天下^{みんしん}の民心を得ることが出来ないのに、今日のやり方を見ると、頗^{すこぶ}る陰険^{いんけん}にわたる嫌^{きら}いがある」と、元和以来ほとんど300年に近く泰平^{たいへい}の治^ちを致^{いた}した徳川氏の功績^{こうせき}を述べた。

殊^{こと}に慶喜^{よしのぶ}が今回、内外の形勢^{けいせい}を察^{さつ}して、政権を奉還^{ほうげん}したのは、その忠誠^{しゅうじ}の最も嘉^{よみ}すべきものがあるのみならず、慶喜^{よしのぶ}の英明なことは、あまねく天下に聞こえているところであるのに、今これを疎^{うと}んじてその意見を問おうとしないのは、公議^{こうぎ}を採^とるとい^とう王制復古の本旨^{ほんし}に反するものであると、極めて公平な議論を堂々と主張^{しやう}した。越前^{まつだい}の前藩主^{らよしなが}松平慶永^{しゅんがく}（春嶽）がこれに賛成^{さんせい}した。

いわくらともみ はんぱく 岩倉具視の反駁

ところが、参与^{おおはらしげとみ}の大原重徳^{おおはらしげとみ}が第一にこれに反対^{はんたい}し、つい^いで岩倉具視^{いわくらともみ}が最も強^{しゆし}くその趣旨^{しゆし}を述べ立てた。なるほど、徳川氏^{こう}には功^{こう}もあつたが、また罪^{つみ}もあつた、と彼は言^いって、家康以来、上^しは皇室^しを凌^{しの}ぎ、下^{しも}は公卿^{こうけい}、大名^{だいめい}を抑^{おさ}えて、久^{ひさ}しく大義名分^{だいぎなぶん}を乱^あした事実^{じじつ}を挙げた。殊^{こと}に米艦^{まいかん}の渡来^{わたく}以後^{いご}は、勅使^{そくし}に背^{そむ}いて諸外国^{しよこく}と条約^{じょうやく}を結^{むす}んだのみならず、憂国^{ゆうこく}の親王^{しんおう}、公卿^{こうけい}、大名^{だいめい}を押し込^こめ、或^{ある}いは勤王^{きんおう}の志士^{しし}を殺^{ころ}し、或^{ある}いは長州再征^{えいき}の役^{やく}を起^{おこ}して国内^{こく内}の治平^{ちへい}を破^{やぶ}ったりしたと。

故に、慶喜が若し真にその責任を感じるならば、当然、自ら官を辞し、土地人民を返納して、以って王政復古の大業を翼賛すべきである。しかし今、いたづらに政権の虚名を奉還して、土地人民の実力を保有しているところを見ると、その本心が果たして忠誠であるとは思われない。ならば、先づ諭して官位を辞させて土地人民を返納させ、彼が真に忠誠の赤心を顕したならば、そこで初めて彼を召して大政に参与させるべきであると論じた。

薩摩藩の久保利通がこれに賛同すると、土佐藩の後藤象二郎は反対して、藩主の意見を固持した。

こうして尾張、越前、土佐の3藩は山内豊信の提議に賛成して、薩摩、安芸の2藩の主従は岩倉具視の反対説に賛成して譲らず、両派の論争はますます激しくなって容易に結末がつきそうに無かったので、ついに天皇は、暫時の休憩を命じられた。

西郷隆盛の意気

この日、薩摩藩の西郷隆盛は、日中の会議には列したが、夜に入ってから朝議を全く久保利通に譲って、自分は各所の警戒や諸軍の指揮につとめ、兼ねて諸藩の動静に注意していた。それで、この休憩中に、会議の成り行きを心配した同藩の参与岩下佐次右衛門がひそかに出でて隆盛に相談すると、隆盛は泰然として言った。「こういう場合に、議論などが役にたつものか、ただ短刀あるばかりだ」と。佐次右衛門が入って岩倉具視にこれを告げると、具視はここに心を決して、山内豊信、松平慶永らがな お前説を固執するならば、非常手段をもってこれを決しようと乃ち短刀を懐にして、先づ安芸の藩主浅野長勳を召して内意を告げた。

そこで長勳は同藩の参与辻将曹をやって、土佐の後藤象二郎にそれとなく説かせると、象二郎はすぐに悟って、豊信、慶永の2人に説いて思い直させた。やがて会議が再び開かれると、ついに具視の説に決して、天皇のご裁可を仰いで、將軍職辞退御聞届の事は慶永から慶喜に伝え、辞官、納地の件は慶勝、慶永の兩人から慶喜にそれとなく諭して、慶喜から奉請させる事として議事を終わった。時に夜中の12時だったということです。

二条城の慶喜

一方、慶喜は、前にも述べたように、二条城でご沙汰を待っていたのですが、この時、城の内外には、俄かに皇宮守衛の任を解かれた会津、桑名の2藩の兵を始め、譜代諸藩の藩士や旗本などが、凡そ10,000ほども集まって来ていた。彼等はいづれも心中ひそかに慶喜の大政奉還を喜ばなかったのに、今また朝廷が、慶喜を全く除外して新政府を組織したのを見て大いに怒り、是明らかに「公議を採る」の勅詔に反したものである。畢竟、薩摩藩が2,3の悪公卿と気脈を通じ、幼帝を擁して威権をほしいままにしようとするものであるから、速やかに討薩の表をたてまつって、君側の姦を除くべきである、と喧々



岩倉具視

第1話 王政維新

ごうごう
囂々と騒いでいた。

けれども、^{よしのぶ}慶喜が固くこれを抑えて許さなかったの、^{かなえ}わづかに事が起こらずにいたが、城中は鼎の^わ沸くが如く、士卒はことごとく怒って火のようになっていた。

しょうぐんしょくじたい ちょうきよ 将軍職辞退の聴許

そういうところに、小御所会議の決議を伝えるために、会議の翌日(12月10日)、^{よしかつ}徳川慶勝、^{よしなが}松平慶永の2人が登城したのです。2人は^{よしのぶ}慶喜に面会して、^{むね}将軍職辞退 御聞届の旨を伝え、^{よしのぶ}慶喜が謹んでこれを^{うけたまわ}承ると、更に辞官、^{ないゆ}納地の内諭を以ってした。これに対して、^{よしのぶ}慶喜は、現在の城中の有様を述べて、今、直ちに官位を辞して領地を返納したならば、いかなる変乱が生じないとも限らないので、^{ゆうよ}暫くの猶予を請い、人心の鎮まるのを待って命を奉じることにはたいといひ、2人に、その^{あつせん}斡旋を頼んだ。2人も^{まこと}誠に^{もつと}尤もな次第であると認めたので、直ちに^{さんだい}参内して、この旨を言上した。

この時、^{たかもり}隆盛、^{としみち}利通らの薩摩藩士は、土地人民を奉還するかどうか^{よしのぶ}慶喜の^{ちょうし}朝旨を奉じるかどうかの別れ目であるので、この点を^{めいりよう}明瞭にしなければならない、と言って反対の意見を主張した。しかし、^{よしなが}松平慶永が二条城の実際の有様を述べて、ともかくも辞官納地の事は、^{よしかつ}暫く^{よしなが}慶勝、^{よしなが}慶永に一任されるように^{こんがん}懇願して^{ようや}漸くにして^{ゆる}聴された。

ちようしゅうへい にゅうきょう 長州兵の入京

ところが、この夜、さきに薩摩、安芸の2藩と共に^{とじょう}倒幕の密計をめぐらして上京の途上^あに在った長州藩が、新政府方から、^{がた}至急進発せよ、との知らせを受けて入京して来て、^{しんこくじ}進んで相国寺内に陣を張った。朝廷は特にご満足^{かんきゅう}の意を伝えられ、翌11日には、内外9門の見張り、及び^{まか}緩急に任せて^{あいはげ}相励むようにとの命が下された。これより長州藩は^{あわ}薩摩藩と心を協せて、京都に大活動をするようになったのだが、こうして藩幕府の勢力が一段とまた強くなると共に、朝廷では、^{いわくらともみ}岩倉具視らが主張して、^も若し^{よしのぶ}慶喜が、彼れより奉請して辞官納地をしないならば、我れより命を下そうということになり、すでにその草案までもこしらえた。

ばくへい ふへいふまん 幕兵の不平不満

ところが、早くもその事^もが洩れたために、二条城の内外に集まっていた幕府方の兵士は、旗本が5,000、会津藩兵が3,000、桑名藩兵が500余で、殆ど10,000人ほどでしたが、大いにこれを^{いきどお}憤って、今にも出でて^う薩長勢を撃とうとした。この時、^{よしのぶ}慶喜は^{よしなが}松平慶永を召して、城中の^{ふおん}不穩の有様^つを告げ、「私がいかに^{ふびん}不憫であっても、朝敵となつて祖先を^{はづかし}辱めることはしません。どうぞ、あなたも^{せいしん}誠心をもって私を助けてください」と言ったので、^{よしなが}慶永は^{かんるい}感涙をはらはらとこぼして、^{よしのぶ}仰ぎ見ることが出来なかったといわれる。

そこで、^{よしのぶ}慶喜は出でて諸隊長を見て、^{ちんぶ}鎮撫して言った。「^も若しわしが腹を切つたと聞いたら、お前たちはしたいと思うようにせよ。さも^{けいきょうどう}ない間は、^{いたくらかつきよ}輕挙妄動してはならんぞ」と。老中の^{しょうとつ}板倉勝静も最も鎮撫につとめた。そうこうするうちに日が暮れたので、万一、城外の兵が、薩長の兵と^{しょうとつ}衝突でもして、

第1話 王政維新

大事を惹き起してはならないからとて、命じてことごとく城内に入れさせた。

慶永は夜半になってから二条城を辞して帰って、つぶさに城中の有様を岩倉具視に告げた。

慶喜は大阪城に赴く

こうしてその夜は何事もなくして済んだが、しかし、こういう状態の下に在っては、いつ、薩長勢、即ち朝廷側と、幕府側との間に衝突が起こらないとも限らなかったので、翌12日、慶勝は慶永と相談の上で、二条城に赴いて、前将軍慶喜に、一旦大阪城に退き、激昂する旗本及び諸藩兵士の沈静するのを待って、再び入京し、辞官納地の奉請をされてはどうかと勧めた。

慶喜も、もはや鎮撫の手段も尽き果てていたところであったので、喜んでこの忠言に従い、夜に入るのを待って、松平容保（前京都守護職）、同定敬（前京都所司代）の兄弟及び老中板倉勝静並びに旗本の兵を率いて、密かに二条城の裏門から出て大阪城に赴いた。諸隊の多くは、勿論、全くこれを知らずにいたが、翌日になって慶喜が城中にいないのを知ると、いづれも切齒扼腕しながらその跡を慕って大阪城に集まった。

薩長の倒幕準備

言うまでもなく、慶喜の下阪は、全く朝廷に対する恭順の誠意のあらわれでしたが、一方で、薩長方はすなおにこれをそうとは信じなかった。彼等は、慶喜が大阪城を根拠として、朝廷に対抗する計略を立てんがために先手を打ったのだという風に考えた。そこで、長州藩の品川弥二郎、世良修蔵、薩摩藩の西郷隆盛、大久保利通らは、さきの、慶喜が大政を奉還する前に薩長の2藩に下った倒幕の密勅を復活させて、この際に一大決戦をしようとの決心を固め、内々にその準備に取りかかった。

思うに彼等は、一度はどうしても戦わなければ、本当に徳川氏の勢力を打ち破ることが出来ないと思っていたところでしたので、それには今、慶喜が朝旨を奉ぜずにほしいままに下阪した事を理由として、これを責めて戦いを開けば、我れは朝敵を討つ官軍となって名分が立ち、士気の上にも大いに有利であると考えた点もあったのでしょう。

両軍の勢力

この時の両軍の勢力を見ると、朝廷側は、薩長の外に因幡、備前の2藩の兵を合わせて6,000ばかりだったのに対して、幕府側は、旗本の兵の外に会津、桑名の2藩は言うにおよばず、彦根、紀伊、津、大垣、加賀等の諸藩の兵を合わせて、凡そ朝廷側の3倍がいた。その上に大阪湾には、薩長側の特に恐れた徳川氏の優勢な海軍が、海軍総裁矢田堀景蔵、同副総裁榎本釜次郎（武揚）らに引率されて、悠々と遊弋していたのです。

けれども、幕府側は、第一に、慶喜が戦いを好まなかったもので、諸藩士もまた多くは干戈をもって争うとは思っていなかった。ただ会津の一藩だけが、君臣一同で強硬に主張して、断じて戦わなければ、この恥辱を雪ぐことが出来ないと言っていたのみです。

第1話 王政維新

ちゅうりつは あっせん 中立派の斡旋

この間に在って、初めから中立の立場に在った土佐、越前、尾張の三前藩主（山内豊信、松平慶永、徳川慶勝）は、極力、平和に事を解決しようと努力した。殊に豊信は、極めて痛切な建白書を奉り、「大変革以来、朝廷の旧幕府及び会津、桑名の2藩に対する処置が事毎に偏頗で、公平を失っている点を指摘した。そして、「こうしてはわざと戦乱をも惹き起す憂いがあるから、速やかに諸侯を召集して公議を興して朝廷の公明正大な所以を顕すべく、徳川氏の辞官納地の事の如きはよろしくこれを慶永に一任しておいて、第一に先づ議事の公平な事をこそ天下に知らせるべきである。」と言った。この意見には賛成する者が頗る多かつたのみならず、阿波、筑前、肥後、久留米、盛岡、柳河、二本松、肥前、対馬、新発田の10藩の重臣らもまた書を奉って、戒厳を解き、公議をもって事を処するように建議した。

かんだい さた 寛大な沙汰

それやこれやのために、朝廷の評議もいくらか和らいだところに、豊信、慶永、慶勝の3人が、いよいよ誠意を尽くして斡旋したので、ついに12月24日に至って、薩長側の猛烈な反対があつたにもかかわらず、朝議寛大に一決して、慶勝、慶永を遣って、慶喜に、「辞官の上は前内大臣と称せよ、又、新政府の費用の献納は、領地の内から取り調べの上で、天下の公論をもって確定することにする」という二か条のご沙汰を伝えさせることになった。

ところで、ここに一つ皆さんに注意しておきたいのは、初め、具視ら一派の倒幕派が大いに主張していた領地返上の文字が、このご沙汰の上に見えていないことです。この議を強いて主張して新政府の費用をことごとく徳川氏の納地のみをもって弁じようとする事に比べて、このご沙汰は頗る不公平です。しかし、豊信、慶永、慶勝らが強硬に論争して、新政府の費用は、当然、慶喜を始め諸大名一同からの領地の石高に応じて徴収すべきであると建議した結果です。まことに趣意の通つた話でして、これなら、慶喜が朝命を奉じて、すぐに部下の騒ぎを惹き起す憂いもなかつたのです。

しょぶんもんだい らくちやく 処分問題の落着

そこで、26日に慶勝、慶永の2人が大阪に下つて、ご沙汰書を達し、慶喜に参内の内命を伝えた。慶喜は、28日に、謹んで遵奉する旨を2人に託して奉答した。2人は、30日に京都に帰るとすぐに参内して、慶喜の奉命の次第を復命した。こうして、さしもの難問題であつた徳川氏の処分も、慶応3年の大晦日の夜をもって、ここにいよいよ落着し、一時、急を告げるかの如くに見えた京阪間の風雲も全く一掃された。大阪城中の人心も漸く平穩に収まりかけた。

ところが、ちょうどこの時、全く思いがけない、殆ど偶然ともいふべき出来事が江戸に起こつたために、忽ち形勢が一変して、天下の大事を惹き起した。

えど じょうせい 江戸の情勢

これより先き、江戸では、将軍が上京した留守の幕府を、老中の稲葉正邦、小笠原長行らが守つていたが、大政奉還、将軍職辞退、王政復古の号令煥発などの飛報が、しきりに達するにつれて、江戸詰め

第1話 王政維新

の諸大名や旗本は大いに驚き、京都のほうの事情も極めず、いたづらにただ激昂して動揺を始めた。飽くまで徳川氏のために君臣の大義を守って、いざという時は、薩長を向こうにまわして一戦を交えようと、互いに誓いを立てたりしていた。のみならず、中には上長の命を待たずに、忽ち党を結んで西上する兵士なども少なくなかった。

浪人の横行跋扈

こうして、江戸の市中は何となく騒がしくなったところに、ますます人心を不安にしたのは浪士の横行跋扈でした。彼等は5人、10人と組をなして、市中の富豪の家に押し入り、軍用金の徴発と称して莫大な金銀を奪ったりした。初めは何者の所為とも分からなかったが、だんだん探索して見ると、三田の薩摩の藩邸に潜んで、そこを根拠地としている勤王派の浪士およそ200余人の者が、ひそかに関西のほうの同志と謀を通じて、倒幕の密計をめぐらしながら、すでに二十万両にもおよぶ軍用金を集めている事が分かった。それで幕府は、急ぎ譜代大名及び五千石以上の旗本若干名に命じて市中を警戒させて、厳重に暴徒を取り締まらせた。

江戸城の西丸の炎上

たまたま慶応3年12月22日に江戸城の西丸が焼けたが、これも浪士の所為らしく疑われたので、幕府は、その引渡方を薩摩の藩邸に交渉した。ところが、藩邸の留守居役は、もとより浪士と結託していることですから、その請求に応じようとしなかった。のみならず、浪士らは市内の取り締まりが厳重になって、もとのようには暴行が出来なくなったのを怨み、その翌23日の夜に警衛諸藩の筆頭である庄内藩の屯所に乱入して、発砲したりした。

しかし、幕府の重職らは、天璋院夫人(13代将軍家定の夫人で島津斉彬の養女)に憚るところがあつてか、容易にこれを許し得なかったが、夫人がこれを許したので、ついに24日の夜、大目付らは警衛諸藩に向って浪士討伐の命令を下した。そこで、庄内、厩橋、松山、鯖江、上山の諸藩および旗本の兵らは、フランス人の砲兵士官ブリューネの方略に従って薩摩の藩邸を包囲し、砲撃を加えて、忽ちにしてこれを焼き尽くした。

薩摩藩邸の焼き討ち

こうして数倍の大敵に包囲攻撃されて、浪士らは大いに狼狽したが、辛くも生き残った60余人は、邸の南方、上山藩の攻撃場所を突破して品川に走り、予ねて応援に来ていた薩摩の軍艦胡蝶に逃げ込んだ。幕府の軍艦がこれを見て攻撃すると、胡蝶は応戦しながら出帆したので、幕艦は3隻でこれを追ったが、ついに翌年正月2日、胡蝶が兵庫に入港するに及んで、追撃を止め、折から、大阪湾に遊弋していた幕府の海軍に加わった。

これより先き、幕府はこの事件が起こるや否や、江戸の状況を報告させるためと、一つは、京阪の間に万一に事が起こった時の用意のためと、大目付滝川播磨守具知、勘定奉行小野友五郎の兩人に兵を率いて西上させた。2人は、大晦日に、大阪に着いて、浪士の暴掠および薩摩藩邸焼き討ちの顛末を慶喜に

訴えた。

この時、大阪城中では、すでに前にも述べた通り、事を平和に解決するに決して、^{よしのぶ}慶喜は謹んで朝命を奉じることにした後でしたが、もともと今回の朝廷の処置は、必ずしも真の^{ちようし}朝旨ではなくて、薩藩らの陰謀で出たものであると不満に思っていたところでもあったので、ここに^{ともさと}具知らの報告を聞くと共に、いよいよ薩藩を憎み、且つ兵力の加わったのに勢いを得て、城中の議論は忽ち主戦論に一変した。

「憎むべきは薩摩藩の態度である、幼帝を擁して^{いけん}威権をほしいままにしている^{かんしんども}奸臣共を除かなければならない」という城中の主張には、さすがに^{きようじゆん}恭順^{よしのぶ}第一の^{うなづ}慶喜も^{ともさと}領かずにはいられなかったので、ついに、断然、討薩の決心を固めるに至った。

その結果が有名な^{と ぼ ふ し み}鳥羽伏見の戦いとなり、引き続いて^{いわゆる}所謂維新の戦乱となったのですから、その次第は改めて次の話に述べますが、^{さつていしゆうげき}薩邸襲撃の一事は、事は小さくても関係するところは極めて大きく、実に^{ぼしんせんえき}戊辰戦役の^{どうかせん}導火線になったと言えます。

(第1話 王政維新 終わり。 次は前頁に戻り、第2話 維新の戦乱)